有識者インタビュー

女性が自分の財布を獲得

弘前大人文社会科学部
杉山 祐子教授

日本の農山漁村の場合、「専業主婦」というのは存在しない。つまり、家事や育児だけに専念している女性はいなくて、昔から男性と同じように生産活動に従事してきた。

だが生産物の対価を受け取る権利を有していたかというと、必ずしもそうではなかった。権利があるのは男性＝家長だけだった。

一方、嫁いだ女性はしゅうとめからその家の味を覚え、盆や正月には親族に行事食を振る舞うなど、地域の食文化を受け継いだ。東北では冬に備えた漬物づくりが特徴的だ。

そうして継承した食文化が金銭と結び付いたのが女性の食ビジネスだと思う。きっかけは戦後、特に高度経済成長期ではないか。成長に取り残された農山漁村で「女性にも通帳を」などの掛け声の下、女性がモノを直接売るようになった。

かつてはお金が必要になると家長や実家に頼るしかなかったが、ようやく自分で自由になる財布を手に入れることができた。（1990年代以降に）産直施設が次々整備されると一気に加速した。

日本で言えば明治以降になるが、工業化が進むと男性は外でお金を稼ぐようになり、稼がない女性の仕事は低く見られた。だが女性も換金手段を得たことで家庭内の力関係の差は縮まったと思う。

本紙3ページに続く